

クラレノを越えて

sasagani

気が付くと目の前に暗い隧道がぽかりと口を開けていた。辺り一面が乳白色に染まった果てのない空間。遠近感も掴めず、立っている地面すらもわからないその空間にあるのは、どこに続いているかも知れない隧道の入り口だけだ。

ぽつぽつとざわめきが起こる。そこにいたのは僕だけではなかった。何十人——人種も性別も関係ない雑多な人間が集められていた。そうこうしている間にも人影はどんどん増えていく。

ようやく増加が止まった。数えてみると百人ちょうど。雑多な集団だが平均年齢は若いように思えた。年端のいかない子どもと僕のような二十代の若者を合わせて七割。残りの三割は三十路や四十路が中心で、わずかに壮年や老人が混ざっている。

ほとんどの人が戸惑いの色を浮かべていた。狼狽していた。その様子を見て、反比例するように僕の気持ちは落ち着いていく。

この奇妙な場に来る直前のことを思い出してみる。僕は半年前に職を失い、生活保護を当てにしながらその日暮らしの生活を送っていた。新たな職を探す気にはとてもなれず、親や友人といったあらゆる人間関係を断絶させて幼い頃からの習慣に耽っていた。

それは空想——取り留めのない壮大な空想だった。

僕の空想に定まった形式や手順はない。ふと思いついたこと——例えば現実に起こるわけのない不思議な現象や存在しない幻想動物を思い描いたり、宇宙や物質の神秘に独りよがりな解釈をつけたりするというものだった。強いて言えば、その空想の中心にいる僕こそが唯一定まった黄金律だった。

ここに来る前も、アブラゼミのけたたましい鳴き声と茹だるような暑気の中、自室の天井を見上げながら空想をしていた。そのとき考えていたのは「僕にとって都合の良い王国とはどんなものだろうか」だった。

その国に住まう者は、王である僕を誰も非難せず、かといって誉め讃えることもない。そのような虚飾を一切取り払い、あらゆる者があらゆる他者を理解して認め合うことができる国——それが、僕が支配する王国だ。

国民達がいかなる生業を持ち、いかなる言語を用い、いかなる物を食べ、そしていかなる文化を築いたか。微に入り細に入りディティールを固めていたところまでは記憶にあった。おそらく

はその最中にここへと連れてこられたのだろう。

しかし、一体誰に？ どうやって？ なぜ僕はこんな場所へと連れて来られたのだろうか。その答えは全く出なかった。

ふと暗い隧道へ戻した目に、それまでに存在しなかったものが映った。

隧道の中から現れた者がいた。青灰色の生地に赤い斑模様の浮かぶ衣を頭から被った人物である。顔も見えないその人物が乳白色の空間に足を下ろした瞬間、隧道が激しく燃え上がった。

「き、君は誰だ？」

集団の一人が煉獄もかくあらんとばかりに燃え盛る炎の前に立つ怪人物に訊ねる。

訊ねたのは知性的な風貌の黒人男性。誰もが知るハリウッドの名優の若かりし頃のような。おそらく欧米の人間だろうが、英語が不得意なはずの僕にもなぜかその内容が理解できた。

怪人物は何も答えなかった。集められた者達はざわめきの声を上げ、中には怪人物に向けて罵声を浴びせる者もいた。だが、得体の知れない雰囲気とその背後に燃える炎にしり込みし、誰も彼に近付こうとはしなかった。

おもむろに怪人物から羽虫が飛ぶような耳障りな音が発された。それと共鳴するように集められた者達の体が震え出す。

「な、何だこれは？」

自分の掌を見て、黒人男性が目を見開く。そこには銀でできた小さな鍵が生まれていた。

「あ、あたしにも」

「こっちもだ」

どよめく人々の手に、同じような銀の鍵が握られていた。

「おい、この鍵は何なんだ？」

幾人かが詰問するが怪人物はやはり何も答えなかった。

銀の鍵を手にしたのは老若男女問わずだったが――ただ一人、それが現れなかった者がいる。

それは、僕だ。

どうしてか、僕の手の中にだけは銀の鍵は現れなかった。妙な疎外感と孤立感を覚えつつ、僕も同様に鍵を握っているように振る舞いながらそれが見抜かれないように話の矛先を変えた。

「その炎の道は？」

僕が訊ねると、それまで沈黙を通していた怪人物がぐっと身じろぎをした。

「……クラレノ」

嘎れた声でそう答えると、怪人物は衣の裾を翻して炎に包まれた回廊の中に消えた。場は騒然となった。この訳のわからない状態について理解しているだろう人物が自殺としか思えない行動を取ったからだ。

僕は落ち着いていた。なぜかは知らないが、わかっていた。

怪人物は炎に身を投じたのではないことを――。

また、彼が案内人だということを――。

たった一言のやり取りで直感的に理解できていた。

それを感じ取ったのは僕だけではなかった。

「彼はきっと、案内人なのよ」

口を開いたのは白人の若い女。身に着けている高級そうな衣服や装飾品、そして洗練された立ち居振る舞いからいわゆる上流階級の令嬢であることが察せられた。

「案内人だって？ はっ、まるで観光ツアーだな。一体何を案内をするってんだ？」

痩せぎすの白人男性がお嬢様に訊ねた。

「決まってるじゃない。その炎の道のよ。たぶん、そこを通れば元の世界に戻れるんだわ」

元の世界——その言葉を耳にし、僕は恐ろしさに身を震わせた。

嫌だ。戻るなんて嫌だ。生き甲斐も何もないあの世界に、空想に耽るしかないあの狭い部屋に戻る——そう考えるだけで筆舌にしがたい恐ろしい感情が胸の奥からせり上がってきた。

「どうしてそんなことがわかるんだ？ 何の確証もないだろうに……………まさか、私達をここに連れて来たのは君なんじゃないか？」

最初に質問を発した黒人男性が、お嬢様に詰め寄る。

「馬鹿なこと言わないで。どうして私がそんなことをしなきゃいけないのよ。私の言うことが信じられないって言うのなら、死んだ御主人様を待つ忠犬みたいにいつまでもここで待っていればいいわ」

腹を立てた様子でそう言うと、女性はつつかと進み出て炎の回廊の中へと入っていった。

見ていた者のほとんどが、炎に焼かれて転がり出てくる姿を想像しただろう。

だが、そんなことは起こらなかった。

「……俺、彼女が言ったことは間違っていないと思う」

「私も同感よ」

何人かの男女が回廊へと踏み込んだ。

それに続く人が徐々に増え、人の流れが生まれた。

本当にこの先にはあの何もない現実が待っているのだろうか。すぐには動かず、揺れる炎をしばらく眺めてみる。理由は判然としないが、そうではないと思った。この炎の回廊の向こうにあるのは現実などではない。少なくとも現実やこの乳白色の空間よりも、自分にとって希望となるものが待っている——そう感じられた。

怯えた顔でおそるおそるその流れに乗る子ども達に交じり、僕は炎の回廊——クラレノへと足を踏み入れたのだった。



クラレノを進む気分を言い表すなら――そう、サーカスの火の輪くぐりをするライオンの心境だろう。しかもそれは一瞬で飛び抜られるような短いものではなく、向こう側が見えないほどの長さだった。まるで炎の陥穽をどこまでも落ちていくような錯覚を感じながら僕らはクラレノの奥へと歩いていく。

足下から左右の壁、天井までの全てを覆う炎は熱を全く持っていなかった。幻影なのか。それとも僕らの常識や理解の及ばない未知の現象であるのだろうか。酸素で燃焼する原理ではないらしく、クラレノの中では普通に呼吸することができた。どころか、炎によって内部の大気が浄化されているのかむしろ鎮静した心持ちとなっていた。

「いつまで続いているのかしら」

最初にクラレノに入った白人のお嬢様――セレブと呼ぶことにする――が立ち止まった。

「おいおい。ここから元の世界に戻れると言ったのは君だぞ」

知的な黒人男性――こちらはフリーマンだ――が言う。

「確かに言ったけど、あなた達にまで無理強いをした覚えはないわよ」

責められるいわれはないと言わんばかりに、セレブは不快感を露わにする。怪しみながらも流れに加わったフリーマンにその言い分を覆すことはできなかった。

「お、おい……」

険悪な空気が漂い出さんとしたとき、痩せぎすの男――ギースと呼ぶことにした――が右側の壁を見て啞然とした。全員がそちらに顔を向けると熱なき炎の壁が激しく揺らめいているのが見えた。

僕の腕に小さなものが触れた。子どもの手だった。プラチナブロンドの髪の少年である。そばかすの浮いた顔を強張らせ、少年は僕の腕を掴んでいた。

無理もない。何か恐ろしいことが起こるのではないかと大の大人ですら恐れ戦いていたのである。僕は炎の揺らめきよりもその柔らかい感触の方に大きく驚いた。あらゆる空想をしたと自負する僕も、子どもの柔らかさは未知のものだった。

炎の揺らぎが速まり、まるでレースカーの車輪が高速回転するときのように安定した像を浮かび上がらせた。

そこに現れたのは大きな湖。澄んだ水をたたえる湖の周囲には、見たことのない形をした石造りの建築物が立ち並んでいた。町並みのところどころにそびえ立つ尖塔の合間から、傾いた夕陽

の光が射し込む。夕映えを乱反射させる湖面のなんと輝かしいことか。

「おお、これは……」

集団の中で最年長と思われる老人が声を発した。

「美しい。何て美しい光景なの」

「なあ。あそこから……帰れるんじゃないか」

「帰れなくてもいい。あの中に、あの景色の中に……入って行きたい」

年配の者を中心とする二十人ほどがその光景へ歩み寄って手を伸ばす。幻像に触れるなり一斉に上げた感嘆の声がふっつりと途切れた。

全員の動きが止まり、幻像に差し出した指先から黒く輝く石へと変わっていく。全身がくまなく黒耀石のように変化し、乾いた音を立てて砕けちった。そして欠片一つ残さず――二十人は姿を消失させたのである。

からからと音を立て、主を失った銀の鍵が落ちる。湖と建造物の幻像が掻き消え、入れ替わるように姿を眩ましていた案内人が現れた。先ほどのような虫の羽音が響いたかと思うと、二十個あまりの銀の鍵が浮き上がり、その衣の内へと吸い込まれた。

「お、おいてめえっ！ 何をした……あの人達をどこにやった？」

捕まえようとするギースの手をすり抜け、案内人はクラレノの行く手に消えていく。

「どういうこと……？」

セレブが困惑して呟くのに、フリーマンが答える。

「決まっている。我々は罠にかけられているのだ」

苦々しげに口元を歪ませて案内人が消えた先を見た。

「罠？ いいえ、違うわ。これはきっと……そう、きっと試練なのよ。神が私達に与えたもうた試練に違いないわ」

セレブは頑ななまでに己の非を認めず、目に狂信的な光を浮かべながら案内人を追って駆け出した。

「何が神だ。どうかしてる」

フリーマンは憤りに肩を震わせる。

「私は戻る。戻って別の道を探す」

踵を返して来た道に戻ろうとしたフリーマンの体が弾かれるように飛んだ。

「――ううっ」

肉の焦げる臭いが鼻を突く。弾き飛ばされたフリーマンを見ると、その顔や手はひどく焼け爛れていた。

「うわっ！」

「きゃあっ！」

後ろの道はすでに炎の壁によって阻まれていた。それは幻の炎ではなかった。僕らもよく知っている、熱を持ち、酸素を取り込んで燃え上がる普通の炎だった。

「後戻りはできない……先に進むしかねえってことだな。たとえ罠があったとしても……」

炎の壁はじりじりと迫ってくる。悠長にしている暇はなかった。ギースともう一人が肩を貸し、火傷を負ったフリーマンを支えながら進んでいく。



混乱の中、僕は残った人数を確かめる。

ちょうど百人いた人間は、残り七十八人に減っていた。

追い立てられながらクラレノに行く僕らの目前で再び炎が揺らめく。

「またか……」

二つ目に現れた幻像は広大な砂漠だった。高みから見下ろす形になっているが地平の果てまでもが乾ききった砂の大地である。生命が滅びるしかないその地を十一頭の獣が進んでいるのが見えた。

獅子、狼、熊、兎といったそれぞれ異なる種の獣が目指す先には、二つの天体が浮かんでいた。空が見事なまでに二つに一一昼と夜とに分かれていた。向かって右の明るい昼には目映いばかりに輝く太陽が、左の暗い夜には静やかに煌めく月が昇っており、獣達はちょうどその境目の線上を進んでいた。

砂漠の試練が獣達を襲う。巨大な蟻地獄。吹き荒ぶ砂嵐。岩石の雨一一獣達は何度も足を止めながら力を合わせてそれらを乗り越えていった。力を合わせて、というのは比喩ではない。試練に直面する度に獣の数が減っていくのは、力尽き倒れるのではなく、文字通り獣が獣を食らって同化していったからである。

食らった獣が食らわれた獣の形質と能力を取り込み、現実には存在し得ない異形の姿となる。亀の甲羅に覆われた鷹の翼を持つ熊を、蛇が毒を以て食らう。そのような同化の連鎖の中で残る獣は二頭だけとなった。一方は十の頭を持つ異形の獅子。もう一方は誰も食らわなかったただの狼である。

二頭は地の果てにある天体に辿り着く。獅子は太陽を飲み込まんとし、狼は月を食らわんとした。昼夜の均衡が崩れる中で両者は相争った。黄金の陽光と白銀の月光とが激しくぶつかり合い、宝石の如く美しい輝きが何度も周囲に飛び散った。

「ああ……っ」

それを眺めていた数人が声を発し、幻像へと近付こうとした。

「行くな、罨だ！」

ギースに注意され、その数人は正気を取り戻して足を止めた。

二つの光が激突する度に砂漠の世界から光そのものが失われ、少しずつ、確実に暗黒が広がっていく。しかし、二頭の獣は争いを止めようとはしなかった。取り返しのつかない、大切なものが世界から消えていく。足を止めた者達は、その滅びの在り様に無二の美しさを感じた。

「う、うわあっ！」

その手が、足が、胴が、黒燿石へと変化していく。

「何だと？ 触れてねえのに……」

ギースが呆然となる前で二十人以上の人間が砕け散った。同じ数の銀の鍵が落ち、どこからともなく現れた案内人がそれを回収する。

案内人がクラレノの奥へと姿を消し、そして後方の炎の壁がゆっくりと動き出した。絶望と焦燥に駆られながら歩き出す五十三人の内、およそ半分が子どもだった。

「……お兄ちゃん。ボク、怖いよ」

それまで黙って僕の腕を握っていた少年が初めて言葉を発した。そばかすの浮かぶ顔が恐怖に引きつっている。僕はほとんど反射的に少年へと笑顔を向けた。

「君、名前は？」

少年は、戸惑いながら答えた。

「え……ボクはディビッドだよ。お兄ちゃんは？」

僕は自分の名前を伝え、

「大丈夫だよ。怖がる必要なんてないさ」

そう言って震えるディビッドの頭を撫でる。ディビッドの体の緊張が解けるのがわかった。僕は自分の取った行動に大きな驚きを感じた。子どもになど全く興味がなく、ただひたすらに自分の内なる空想に耽ってばかりだった僕が少年を勇気づけるというのは馬鹿馬鹿しくもあったが、しかし不思議と悪い気分にはならなかった。

「気持ちを強く持とう。諦めないで前に進めば、きっと家に帰れるさ」

調子に乗って付け加えた言葉を聞き、ディビッドはなぜかうつむいた。

「どうしたの？」

心にもないことを口にしたのを見抜かれたのだろうか。焦りながら顔色を窺うと、ディビッドはふるふると首を横に振る。

「ううん、何でもない。ごめんなさい」

「まだ、怖いのかい？」

「違うんだ。ボク……ボク、家になんて戻りたくないって思ってる」

胸を突かれたような気分になったのは、僕がディビッドと同じことを考えていたからだ。

「ど、どうしてだい？」

声を震わせながら訊ねると、ディビッドは僕の顔を見上げた。

「ボク、体が弱くって。ちょっと動いたり走ったりしただけで喘息の発作が出るんだ。だから、外で一緒に遊べる友達もいなくて、ずっとベッドの中で本や図鑑ばかり読んでいたんだ」  
「そうか。それは大変だったね」

月並みな言葉しか口にできない自分に腹を立たせながら、僕はディビッドに対して複雑な気持ちを抱いた。病弱だということを憐れむ反面、彼のことを羨ましく思ったのである。

人生がままならないという点では僕も彼も共通していた。だがディビッドには理由があった。僕のようにやりたいことがなく、空想するばかりの日々を漠然と送る僕とは違い、彼には病気という理由がある。僕にもそんな風に明確な理由があれば――。

己の努力不足を棚上げしていることは十分に理解している。足りないどころか僕は努力しようとすらしていない。僕がディビッドの何を羨んだのかと言えば、つまり病気という理由により努力したくてもできない状態であるという点だった。

自分に足りないものを浮き彫りにされ、心の中では激しく気を落としながら、僕はその代償行為としてディビッドに優しく接することを決意した。

「どんな本が好きなんだい？」

「ええっとね、恐竜の図鑑！」

元気よく答える少年を見て、僕は思わず笑みを浮かべた。

そして――次なる幻像が現れた。

先ほどの続きなのだろうか、三つ目の幻像は闇から始まった。闇の中にぽつぽつと赤い光が灯る。まばらだった光が無数に広がり、周囲の一面が赤く染まった。目を凝らすと、光を発しているのは花の蕾のようだった。

蕾の赤が紫に変色する。闇が吸い取られたかのように世界が明るくなり、蕾が濃紺となったときには世界には光が溢れていた。

「見るな、目をつぶれっ！」

ギースが叫ぶ。五十数人は一斉に瞼を閉じ、幻像を見ないようにした。

「……無駄だよ」

そう呟いたのは二人の男の肩を借りるフリーマンだった。フリーマンは炎の壁に顔を焼かれ、目を開けられるような状態ではなかった。

「な、何でだよ！ どうして目を閉じても見えるんだっ？」

ギースが慌てふためく。五十人が閉じた瞼の下で幻像は移ろい続けていた。

濃紺の蕾の色が薄らぎ、青へと変じると共に綻んでいく。伴うように世界も青みを帯びて空が生まれた。七分ほど開いたところで白く染まり、空のところどころに雲が生じる。

「先ほどの砂漠も、私には見えていた。目を閉ざしても無意味なのだ。この幻像は、おそらく私達の脳の視覚野に直接送り込まれている……」

開ききった花が黄色になり、空の明るさが頂点に達した。世界が昼を迎えたのだ。花と世界に活力が漲る様を認識して、七人の大人が黒耀石のように石化した。

花の色が緩やかに翳っていく。黄色から橙へと移ろい、世界が夕闇に覆われていく。夜へ回帰する直前、花が真紅に染まって生と死の境目を暗示する美しさが広がった。

「うわああん、いやだっ、いやだよう！」

子ども達の中から泣き出す者が現れた。混乱が伝播し、十三の幼い体が黒く輝く石となる。

「き、恐怖を感じてもいけねえのかよ……」

愕然とするギースの前で真紅の花弁が黒ずんでいく。

花が漆黒となって散り、世界が再び闇に包まれた。音もなく石となった子ども達が碎け散った。からからと銀の鍵が転がり、案内人がそれを回収しに現れ、そして消えた。

「もう……もうだめだよ、お兄ちゃん。ボクらここで死んじゃうんだ」

ディビッドの手が小刻みに震えていた。僕は小さな手をしっかりと握って言う。

「大丈夫だって言っただろ？ 気持ちを強く持つんだ。そうすれば、絶対大丈夫だから」

僕はディビッドを励ますと、同じように震える子ども達の肩を一つずつ叩いて声をかけ、その最後尾について前進を促した。

進んでいくと、一人で先へ駆けていったセレブが立ち尽くしていた。

「ああ……なんて、なんて……」

クラレノの炎を見つめて讒言を漏らすセレブに、ギースが声をかける。

「あんた、生きてたのか」

しかしセレブは炎から視線を逸らさない。

「今まで世界中を回って、美しいとされるあらゆる美術品や宝石、景色を見てきたけれど……こんな……こんなに美しいものは見たことがないわ」

セレブの動きがぴたりと止まった。石と化したのではなく、まるで時間が止まったかのように硬直していた。

「どうなってやがる？」

ギースがクラレノの見渡すと、炎が幻像を浮かばせた。

そこは吹雪が荒れ狂う極寒の地だった。砂漠と同じく一本の草木も生えず獣もない極地である。この地に住まう生命は一つだけ——それは極微レベルの生き物だった。幻像が拡大され、凍てついた大地の隙間に隠れる芋虫に似た形の微生物がいるのがわかった。

「これは……」

「おそらく、彼女が見ていたものを私達にも見せようというのだろう」

「巻き戻した、ってことか」

ギースとフリーマンが言葉を交わす中、幻像の吹雪が弱まっていく。常冬のさらに冬が終わりを告げ、微生物達がぞわぞわと蠢き出した。

「クマムシのようなものか……」

それは実在する微生物。自らを仮死状態とし、極寒や真空でも耐えるという緩歩動物である。しかしそれはクマムシではなく、やはり常識とは大きくかけ離れた生命だった。のらくらと地表に這い出た微生物のあらゆる体節がぷくりと膨らみ、そこから人の眼球によく似た球体がせり出した。無数の緩歩動物がそれぞれ数十の眼球をてんでばらばらに動かすその様は余りにもおぞましく、耐えきれずに嗚咽を漏らした者が石化する。

セレブが美しいと口にいたのはこのおぞましいものではなかった。氷が融けてできた泥濘に緩歩動物の体が沈む。再び動かなくなったのは溺れ死んだからではない。水を吸った緩歩動物の表皮が硬質化する。それは琥珀色の蛹だった。地表の全てが水に満たされた中、無数の蛹が見る者の心を惑わせるように煌めきながら浮かんでいる。全ての蛹の背に裂け目が生まれる。中から現れたのは緩歩動物とはかけ離れた姿をした生命だった。

まず出てきたのはつるりとした背中——そう、それは紛うことなく人の背中だった。白磁のように滑らかな肌を持つ、中性的な容貌の人間が身を起こす。極微の人間の額には平らかな角が突き立っていた。透き通る角を天に向けると、全身から仄かな青い光を発して飛行した。常冬の極地で乱舞する青い光の群。これこそがセレブの心を震わせた光景に違いなかった。

「あ……ああ……」

硬直が解け、セレブが恍惚とした声を漏らす。涙を溢れさせる両目から石となる。そして身に着けていた高価な衣服や装飾品ごと黒耀石の彫像となった。セレブを加えた八人が銀の鍵を残して消え去った。

鍵を回収しに現れた案内人の姿を見て、僕はようやく彼が担うもう一つの役割を理解した。

残るのは、二十八人となった。

クラレノの幻像は続く。

五つ目は人智の及ばぬ深海だった。ペンギンをより魚に近しくしたような深海生物の群が八つの噴き上がる海底火山の間を縫うようにして泳いでいく。最も大きな噴火口の周りをぐるぐると旋回し、矢のように溶岩の中へと飛び込んだ。数十匹の深海生物は尖った嘴に真っ赤なミミズをそれぞれくわえながら出てきた。深海生物は高温の体液をまき散らすミミズを咀嚼し、嚥下してけたたましい喜悦の声を上げた。

六つ目の幻像は、煮え滾るマグマの世界だった。そこで活動できるのは珪素を中心とした無機物で構成された鉱物生命だけである。短い前足と巨大な後ろ足で緩慢に動き回る巨岩生物の表面に、植物的性質を持つと思われる苔のような微量金属が貼り付いていた。赤黒い空から巨大な機械の触手がするすると伸ばされる。巨岩生物を絡み取るや触手は槌のような形に変じた。微量金属が巨岩生物を滑らかに覆う。触手から電磁場が発せられ、巨岩生物は砲弾となって異なる星系へと飛ばされていった。

ここでとうとうギースが消え、残る人間は六人となった。僕と火傷を負ったフリーマンを除けば後は全て子どもだった。僕はディビッドの助けを借りて何とかフリーマンの体を運んだのだが、その労力も次の幻像が現れるまでのことだった。

七番目に現れたのは宇宙空間だった。未知の銀河には距離の近い大小二つの恒星——連星が浮かんでいた。時間の流れすら不明確な光景の中で小さい恒星がかっと輝きを放った。

「重力崩壊……超新星爆発か……」

よるめきながら、フリーマンが呟く。道すがら聞いた話によると、彼は天文に関する研究業に就いていたという。

小さい方の恒星の輝きに引き込まれるように、大きな恒星も膨大な量の光を発した。二つの恒星はまるで瓢のような形となって連れ添うように滅びていく。

「こ、これは凄い。こんな現象を間近で見ることができるとは……」

それまでの幻像には一切心を動かさなかったフリーマンが、とうとう石と化した。三人の子どもも砕け散り、案内人が銀の鍵を集めに現れたときに残っていたのは僕とディビッドだけだった。

「……………クラレノ」



案内人はぼそりと呟くと、今度は姿を消さず、僕ら二人をいざなうように歩き出した。

「お兄ちゃん。ボくら、どうなっちゃうんだろ……」

ディビッドは縋るように僕の腕を掴む。

「平気だよ。僕を信じていれば、決して悪いようにはならないから」

それはディビッドを安心させるための方便や気休めなどではなかった。ここまでの道のりで僕は確信していた。正体は何なのかは依然として不明だが、このクラレノという炎の回廊がこれまで浮かべた幻像は、見覚えのあるものばかりだったからだ。

一日と共に七色に移ろう花々も。緩歩動物が飛行角を持つ妖精へと変生する常冬の世界も。溶岩ミミズを食らう深海生物も。鉋物生命を撃ち出すマスドライバーも。そして瓢のような連星の重力崩壊も。全て僕がかつて空想したものである。

最初の二つ——湖を取り巻く石造りの都市と砂漠を駆ける獣の幻像には覚えがなかった。おそらくあれは集められた者達の誰かが空想したものだったのだろう。

その後の五つは僕が考えたもの——クラレノは僕の空想を読み取り、それを映し出しているのに違いなかった。

僕は考え尽くした空想には頓着せず、思い返すようなこともまずしない。既知の空想に僕の心が動かされるようなことはなかった。それを成せるのは未知の空想のみ。そして日々を空想に費やしてきた僕にとっては、よほどの未知でなければ驚くに値しない。

つまり——僕の心が動かなければ、ディビッドも安心し、他の九十八人のように消滅することはないということになる。

「絶対に僕から離れないで」

そう言って、僕は案内人の背を追った。

幻像はさらに続いた。地球の全ての山脈を合わせたよりも大きな女巨人の髪の毛の世界に住まうシラミによく似た直立生物の営み。金色の光を纏う屈強な戦士と銀色の光を用いて不可思議なる術を駆使する魔術師の軍勢がいつ果てるとも知れない永劫の戦いを繰り広げている様子。霧に包まれた深山の断崖で両腕をもがれた毛むくじらの白い獣が孤独と絶望に満ちた哀切な雄叫びを上げる。

やはり、全てが僕の空想したものだった。

「怖くないよ。我慢できなくなったら、君が楽しいと思うことを考えて気分を紛らわせばいい」

ディビッドを元気づけようと発したこの言葉が、取り返しのつかない過ちであったことを僕はすぐに悟ることになる。

次に現れた幻像は、鬱蒼とした密林だった。

その光景に僕は戸惑った。

覚えがないのである。シダ植物を中心とした密林は、空想した覚えはないが見たような気はする。空想ではない。それは現実に存在した太古の植物相だった。

「これは、もしかして……」

僕がディビッドの顔を窺ったそのとき、鶏の声を低く鋭くしたような鳴き声が密林の奥から響いた。一頭や二頭ではない。十を超える群が木々の幹を跳び渡りながらこちらへとやってきた。鴝鳥を二回りほど小さくした体つき。二足で駆けて全身を鮮やかな原色の羽毛で包んだそれは鳥

とトカゲを合わせたような姿をしていた。手と足から鋭利な爪を伸ばして古代樹の幹や枝を駆け上るその生物を見て、ディビッドが口を開く。

「……ラプターだ。あれはヴェロキラプトルだよ、お兄ちゃん！」

それは、羽毛恐竜と呼ばれる中で最も有名な種だった。病弱で床に臥せりがちだったディビッドが好んで読んでいたのが恐竜の図鑑だという話を思い出した僕は、とっさに少年の体を抑えようとした。

「待てー」

しかし僕の行動は遅過ぎた。ディビッドは目をきらきらと輝かせながら僕の腕をすり抜けて身を乗り出した。そして、目だけではなく全身が黒く輝く石と化す。

「デ、ディビッド……」

伸ばした手が触れる寸前、小さな体は粉々に砕けて一本の鍵が残された。僕は冷たく光る銀の鍵を手に取り、その頼りない軽さをディビッドの存在と重ね合わせた。普通の人間なら涙を流して慟哭するところだろう。だが、不思議なことに僕の心は微かにざわめいただけだった。

案内人が姿を現す。対面する赤い斑模様の衣の怪人物へと僕はディビッドの鍵を掲げる。案内人は恭しく腕を伸ばしてそれを受け取った。

「あんたは……ただの案内人じゃない。収穫者でもあるんだな」

薄々気付いていたことを口にすると、案内人は頭を深く垂れた。

「その通りでございます、夢見る人よ」

「夢見る人……」

オウム返しに呟くと、クラレノの奥から湿った空気を含んだ風が吹いて炎を揺らした。そよ風程度の強さだったにも関わらず、回廊を覆う炎は見る間に消え失せてしまった。

「こちらへどうぞ……」

案内人は暗い隧道に戻ったクラレノの深奥へと僕を促す。炎を上げていたとはとても思えない苔むした隧道を進みながら、僕はここまで起きたことのほとんどを悟っていた。

このクラレノと呼ばれる道は人の夢を絞り出すためのものに違いなかった。集められた百人はその力を強く持つ者達であり、また子どもが多かったのは大人よりも鮮明な夢を見るからだろう。

クラレノが見せた幻像には、美しさを想起させるだけでなく恐怖を湧き起こす——つまり悪夢もあった。様々な幻像により人の心を揺さぶり、にじみ出た夢をあの銀の鍵に凝縮させた——僕が案内人に収穫者の役割があると考えた理由はそこにある。

「その鍵は何に使うんだ？」

訊ねると、案内人はぼそぼそと応じた。

「これにたっぷり蓄えられた夢見る力を、クラレノを越えたところに在る世界の滋養とするのでございます」

「滋養だって？」

嫌な予感が胸に滲んだ。夢見る力を滋養にするという世界——それが何なのかはわからないが、ここへ呼ばれ、そして唯一人生き残った僕も、同じような末路を辿るのではないかと思ったのである。

「ご安心めされよ。貴君は彼らとは異なる、二つとない存在ですゆえ……」

「どういう意味だ？」

案内人は足を止めた。問いかけに答えようとしたわけではない。案内人の眼前には壁があった——そこはクラレノの終着点だったのである。薄暗い壁の中央にある重々しい鉄扉の前で、案内人は僕を振り返った。

「貴君は銀鍵をお持ちではない」

クラレノに入る直前、集められた人々の手の中には銀の鍵が握られていたが、僕だけはそれを持っていなかった。

「鍵は彼の地へ渡るために必要な素養の単なる代用品にしか過ぎません。その証拠に、他の者はクラレノが見せた試しの幻に心奪われ、そして滅びました。銀鍵なく夢見る人——貴君こそが彼の地の王に相応しい」

それを聞き、全てのことに合点がいった。クラレノは人から夢見る力を抽出するだけでなく、向こう側の世界を統べるに値する人間を選び出すための篩でもあったのだ。

「銀鍵なく夢見る人——新たなクラネスよ」

案内人が扉を開くと、向こう側から差し込む光がその顔を照らした。フジツボに覆われた赤い目の異相。その口元がゆっくりと開かれる。

「ようこそ、幻夢郷へ」

クラレノを越えて至る世界を一目見て僕の胸は打ち震えた。ここならば僕が最後に思い描いたあの空想——僕が統べる夢の王国を創造することができる。儚く消えていったディビッドの顔はもはや心の片隅にもなかった。

そして僕は黒い扉をくぐり、夢見る者が住まう幻夢郷へと足を踏み入れたのである。

〈了〉

## クラレノを越えて

<http://p.booklog.jp/book/33993>

著者 : sasagani

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/sasagani/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/33993>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33993>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.